

農村部における災害復興の営みと空間的資源に関する研究：熊本地震により被災した西原村を事例として

野口，雄太

<https://hdl.handle.net/2324/6787388>

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（工学），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

| | | | | |
|--------|--|------|------|-------|
| 氏 名 | 野口 雄太 | | | |
| 論 文 名 | 農村部における災害復興の営みと空間的資源に関する研究 — 熊本地震により被災した西原村を事例として — | | | |
| 論文調査委員 | 主査 | 九州大学 | 教授 | 黒瀬 武史 |
| | 副査 | 九州大学 | 教授 | 趙 世晨 |
| | 副査 | 九州大学 | 教授 | 末廣 香織 |
| | 副査 | 九州大学 | 名誉教授 | 菊地 成朋 |

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

日本における現代の災害復興は、国や地方自治体よる公助がその中心を担うが、その過程で供与される仮設住宅等は基準に則った定型の空間であり、被災地の地域特性に応じた支援とは言い難い状況にある。本論文は、農村部の災害復興の過程を被災者による「復興の営み」と捉え、その営みを支える物的環境と一体的に把握・考察することを目的として、「エスノグラフィック・アプローチ」を方法論として設定、西原村の事例分析を通してその有用性を実証し、農村部の災害復興を考える新たな視座を提示した。本論文が示した方法論は、従来の建築計画学・都市計画学分野における復興研究の枠組みでは捉えることが困難であった、被災者の生活と物的環境の相互関係をより包括的に理解し、地域に即した災害復興の検討に展開する可能性を備えており、価値ある業績である。

よって、本論文は博士（工学）の学位に値するものと認める。